

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

no

4

TEL 0551-23-3008

FAX 0551-23-3013

チュウホク ドット コム

中北の地域社会 (COM munity)の心の交流 (COM munication)をめざします

峡中地区・峡北地区合同 地域教育フォーラム

開催されました

平成23年度の峡中地区・峡北地区合同地域教育フォーラムが、10月25日(火)に日本航空学園内J-shipホールで開催されました。約500名の方々の御参加を得て、講演・実践発表を中心に展開されました。また、日本航空高校ダンスカンパニー(ダンス部)の御好意により、開幕のアトラクションとして、巨大オルゴール(ダンスオルガン)を使用したダンス・バレエが披露され、多くの参加者が魅了されました。なお、次に講演等の趣旨を掲載いたします。

講演 『すてきな人を育てる地域力』

松木上次氏 [萌木の村(株)社長]

私は物心ついてから30歳まで、ポールラッシュ先生と親しくさせていただきました。先生は、子どもたちの前では、(生活の)苦しさを見せたことがありませんでした。そして、いつもその振る舞いは笑顔でした。苦しさを乗り越えたときの楽しさも教えて貰いました。先生からリーダーの姿を感じることができたのです。

(中略)



私は、1971年に清里にロックという喫茶店と、ハット・ウォールデンというホテルを1978年につくって、『萌木の村』を始めました。その後、「このままいったら清里はおかしくなる」と感じました。それは、清里の土地の値が上がっていくというバブルの到来です。そんな中で、このま

まいったら「私の町は崩れてしまう、もっとしっかり足腰の強い地域を作らなければ」という思いに駆られました。

そして、1984年私は、清里の仲間30人とともにヨーロッパへ約3週間の旅行に行きました。町作りの勉強に行こうと思ったからです。その時出会ったのが一台のアンティークオルゴールでした。そのオルゴールに出会って、私は、地域の中には文化というのが必要だと漠然と思いました。

私は若い頃、勉強らしい勉強をしていませんでしたから、きっと、知的レベルは中学生位なのでしょう。頭が悪くても、ポールラッシュ先生の側にいられたお蔭で感性という“センス”を少し受け継いだのです。たぶん私はその中で、価値観も手に入れていたと思うのです。(中略)

御 礼

このたびの地域教育フォーラムに
多数の皆様にご出席をいただき、
衷心よりお礼申し上げます。

中北教育事務所一同

3月11日の東日本の大震災、清里にも同じように地震があり、停電になりました。その停電の中で、私は何か出来ないかと悶々としていました。

私は暫くしてから、東北の仲間へ電話をしました。仲間の多くが町のリーダーをしていましたから、避難所でも責任者をやっていました。そのなかのひとりに「俺は何も出来ないけれども、出来ることはオルゴールとバレエを持って行って、そこでみなさんの前でパフォーマンスすることだけでも、それは役に立つのだろうか」と言ったら、それは間違いなく良いから来いというのです。会社の従業員、家内全員反対でしたが、私は行く決断をしました。

(中略)



《アトラクションでのダンス男子部員》

この計画が成功したのは、今村博明という芸術監督の価値観がしっかりしていたことだと思います。

彼は、今から三十数年前、日本から英国ロイヤルバレエ団に研修に行ったダンサーです。その時、英国ロイヤルバレエ団から最高の地位でのスカウトがありましたが、公費で研修させて貰ったとの思いと、“自分が日本バレエ界を背負う”という自負心から、彼は帰国します。

彼のような、真面目さがなければ、現在の生徒も立派に育っていなかったでしょう。

しかし、先生がいくらまじめにしっかりと倫理や優しさ、我慢とかいうようなものを教えても、この国や社会がでたらめであり、利己主義とか刹那主義とかというものに囲まれている現在、子ども達はどのように立ち向かっていかなければならないのでしょうか。

そのときこそ、リーダーあるいはここにいる人達が“本物”を見せることにより、“本物”の感動を与えてやらなければならないのです。

私は教育というのは、誇りと夢を与えることだと思います。しかし子ども達も、全ての人にも能力差はあります。能力差はあるし適性があり

ます。適性があるならば、適性ある役割が「あなたにとって一番大事なことだ」ということを教えていかなければならないと思います。

また、私は教育というのは、コンプレックスを解消してやることとされているのです。田舎だからとか、学歴がないからとか、あるいは親が貧乏だからとか、色々理由を付けることが出来ます。

特に、山梨県の人たちは、多くの人が東京に行くと、山梨県出身ということに対して、コンプレックスを持っています。そのようにしてしまったのは、地域の民度の低さだと思っています。

今から山梨県は、あるいはこのエリアの人たちは、自分のふるさとの宝物を徹底的に探すことではないかと思っています。

私は今回の震災は、そのことを警告してくれていると思っています。この山梨というところには、私たちが誇りにできる、次の世代に伝えるものが山ほどあります。

(中略)

戦後60何年間、コツコツ真面目にやってきた日本人が、豊かでみんなが満足して幸せで、夢が持てないなんてことは本当にあってはならないことです。それを創ることは本来リーダーの役割です、にも関わらずリーダーがそのことを求めていないような気がします。



《講演の終わりに拍手をする参加者》

そして、日本が世界の中で信頼される国であるべきだと。それは日本人が持っている優しさとか、あるいは思いやりとかというものではないかと思うのです。私は、まさにこのエリア(地域)は、どういう方向を目指すのかということとを皆で考えて貰いたいのです。

このエリアで育つ子どもたちを、目の前の勝利者でなく、人生の勝利者にしてあげるために、私達に「何が出来るか」ということを考えるべきでないかかと、私は思います。

実践発表 「ゆるやかなかわりの中で、とも育ち」 今 紀子氏 [共育ちの会あ・そ・ぼ代表]

「あ・そ・ぼ」について

今から10年前、理不尽な少年の事件が続いて起きていました。みなさん、記憶にまだ新しいかもしれません。酒鬼薔薇事件、高速バス乗っ取り事件、金属バット事件、私達は子どもに関する活動は何らかの形で続けていきたいと思っていたときでした。そこで、4人のお母さんたちと集り、自分たちに何が出来るかを話し合うことから始めました。やはり「手が必要な子どもたちの所へ出かけよう」ということになり、児童相談所の訪問、養護施設の見学、研修会の参加等準備期間を経て、8年半前に共育ちの会「あ・そ・ぼ」を5人のお母さん達で発足させました。現在、サポートの登録会員170名で、様々な活動を行っています。



「あ・そ・ぼ」の活動案内を説明したいと思います。児童養護施設については御存知の方も多いと思いますが、改めて説明させていただくと、児童養護施設とは、保護者のいない、または、育児放棄、虐待等で環境上養護を要する3歳から18歳の子どもの保護、養育し、その自立を支援する施設です。全国580カ所の養護施設に約3万人の子ども達が暮らしています。片親でも親がいる割合は、9割以上です。昔の戦災孤児とは全然違うのは、虐待を受けている子が入所児の5~7割を占め、4人に1人は何らかの障がいがあり、虐待を受けた子ども達は、心身ともに傷つき、多動、非行、暴力等様々な形で問題が表れています。

私達は何カ所かの児童養護施設を回り、近くでもある明生学園を選び、以後、8年半、交流を続けてきました。どんな交流かといいますと、ふれあいサポートなど、週1回月曜日に行っています。放課後、子ども達と様々な遊び、時々宿題を見る

ことなどです。ガーデニングサポートは約月1回です。園庭に殆ど花がなかったので、そこに庭を造り、花を植え整備しています。そして、年3回、イベント交流会を行っています。子ども達と一緒に料理教室、ライブ、工作等色々なイベントを行い、おやつと一緒に食べます。そして、年1回ですけれども、8月の夏休みの1日、招待交流会を行います。明生学園の子ども達を「あそぼ館」に招待して、丸1日楽しく交流をいたします。

また、12月は、年末の大掃除のお手伝いの後、先生たちとの懇談会も行います。明生学園の交流を主に活動していますが、その他にも様々な活動をしています。人形劇アラジン会、コカリナクラブ森のひびきの他、地域を様々な楽しもうということで、お花見やコンサート、料理教室を開催したり、バスツアーにも出掛けます。

また、講演会、新年会等いろいろなイベントを行っています。ニュースレターを年4回発行しています。総会は年1回です。さらに、介護を語ろう会というのが9月に、やはり今の時代の状況の中で、高齢化社会の中で、必要な内容として新しく発足しました。



《優雅なバレエを披露した女子部員》

共育ちの会 あ・そ・ぼ (連絡先)

〒408-0021

北杜市長坂町坂上条1692

TEL&FAX 0551-32-6292

ゆるやかに、無理なく、楽しく、つながっていをモットーに子どもも、大人も共に育ち合うことを目指して、様々な活動を行ってきましたが、「あ・そ・ぼ」から独立して活動をスタートする会も誕生しました。それが不登校の子ども達の「居場所作り・ひなたぼっこ」です。今日、御来場の皆様には関心の高い内容かと思えます。私達「あ・そ・ぼ」の会は、この会が2年前発足したことを、心から喜び、多くのサポーターが協力会員となって応援しています。



《主催者あいさつ・長坂正彦北杜市教育委員長》

「ひなたぼっこ」設立の思い

ひなたぼっこ代表、西岡美紀恵さんは、長年、教員として子どもたちに関わってきました。西岡さんの設立の思いを読み上げます。1990年代後半頃から不登校の子どもたちが徐々に増え始め、私が退職する2003年頃には全国で13万人を越えていました。2007年には、ここ山梨県でも中学生の不登校率がワースト1になり、学校に行けない子ども達の数は一向に減る気配はありません。退職と同時に八ヶ岳南麓に移り住むにあたって、ここに不登校の子ども達の居場所を作りたい、ここで子ども達に元気を取り戻してもらいたい、ちょっと一息ついてゆっくり自分の道を見つけてもらいたい、と考えました。



《講演前に全員で体操をする今先生》

学校に行けなくて辛い思いを抱えた子どもや親が、そこに行けば気兼ねなく話が出来、気分転換が出来、少し気持ちが楽になり、少し元気が出て、また来ようかなと思える、そんな場所を作りたいと考えました。



《会場風景》

「あ・そ・ぼ」の活動の中で「一緒にやりましょう」という仲間と出会い、とにかく「一歩を踏み出そう」「何が必要かはやっていく中で一緒に考えていこう」と2009年7月に「ひなたぼっこ」を立ち上げました。「ひなたぼっこ」が北杜市長坂上条の古い民家を借りてスタートしてからこの2年間で関った子ども達は19人。毎週通ってくる子ども、時々来る子ども、次の一歩に踏み出した子ども、もう少しエネルギーを蓄えたい子ども、様々ですが、大事にしていることは、無理せず来たいときに来ればいい、自分のペースでやればいい、ゆっくりでいい。現在のスタッフは6人、物心両面で応援して下さっている会員さんは100人を越えています。



《男女混交の優美なダンス》

私達は、子ども達が、自分を信じられるように、そして一人一人が持っている可能性を発揮できるよう、いい人生を送れるよう、サポートできることを心から願っています。